

——9月の中国での反日デモをどう見ましたか。

「世界各地の紛争地で見たくを思い出した。暴動を起こす人々は、最初はためらっていても、人数が増え、いったん破壊行為が始まると行動が過激になり止まらなくなる。今回の中国の場合、騒乱が途中でピタリとやんだ。それが可能な仕組みがある国にはあるのかなと感じた」

——危険地域と呼ばれる場所を含め、海外での勤務経験が豊富ですね。

「1980年代後半にアフガニスタンからの難民支援のためパキスタンのペシャワルで勤務し、時々アフガンの首都カブールなども訪れた。同僚が武装組織に殺害されたり、宿舎の近くに砲弾が撃ち込まれたりした。自分の車の前を走っていた別の車が爆破されたこともある。90年代の世界保健機関(WHO)の緊

急支援課長時代には、内戦下のスーダンなどにも入った。危険な所で仕事をする経験がたくさんあった」

「ペシャワル時代は、情勢が悪化した場合にはすぐ脱出できる準備を常にしていた。枕元には非常持ち出し品を詰めたナップザックを置

き、自宅の車は予備のタンクも含めてガソリンを満タンにしていた。旅客機の手ケットを買えるだけの現金もいつも用意していた」

——海外で日本人が巻き込まれる事件や災害が続発して

「一方で、たとえ危険な状況であっても、そこに行くことが任務であれば行かねばならない職業もある。それでも、一般人が単なる好奇心で危険な所に行くのは反対だ。特に、危険な感染症が流行している地域であればなおさらだ」

「一方で、たとえ危険な状況であっても、必ず地元の新聞を買うようにしている。一面にテロ事件の現場の写真などがあれば、それだけでその地域がそうした事件の起きる状態にあるとわかる」

# 心配癖つけ、判断は自分で

要だ。動物的な感性と言ってもいい。平和な時代が長く続いた結果、今の日本人はそうした感性が鈍くなり、あまりに無防備になっている。海外では『事態は自分の願う方向にはいかないかも』と考える、ある種のネガティブ思考が必要だ。ただ、今の日本人は

逆で善意と楽観的見方でものを考えてしまいがちだ」

「96年にペルーで日本大使公邸人質事件が起き、日本政府が急きよ秘密裏に派遣した医療チームの一員として現地入りした。そして、治安部隊の突入など動きがある際には、大量の負傷者発生を見越して現地の病院の中の人の流れが変わるなど、さまざまな兆候があることを知った。現地の様子を注意深く見ていると、必ず何か兆しがある」

「今日の日本では何か緊急事態が起きると、とかく『行政は何をしていいか』といった方向に矛先が向くが、大切なのは個人がどう危機に向き合っただ。判断を他人任せにせず、自分で決めることだ」



日本赤十字九州国際看護大学学長 喜多悦子氏

きた・えつこ 医学博士。紛争地などでの難民支援に長く従事。05年より現職。米ジョージ・ホプキンス大学院諮問委員。73歳。